

資料

女子大学生とその母親の相互独立・相互協調的自己観

——質問紙法による形成要因と葛藤状況の比較検討——

木内 亜紀¹INDEPENDENT AND INTERDEPENDENT CONSTRUAL OF THE SELF,
THEIR CORRELATES, AND CONFLICTS IN FEMALE COLLEGE
STUDENTS AND THEIR MOTHERS

Aki KIUCHI

The purpose of the present study was to investigate the independent and interdependent construal of the self, their correlates and conflicts in female college students and their mothers. Female college students and their mothers (99 pairs) responded to a questionnaire. As for the affected factors, the results suggested that the students were influenced by 'past school life', by contrast with the mothers influenced by 'family'. On conflicts for the demand from the situation, in both the students and the mothers, it was found that subjects, giving priority to interdependent construal of the self, tended to feel conflicts when the situation demanded them to act independently; on the other hand, subjects who gave priority to independent construal of the self, tended to feel conflicts when the situation demanded them to act interdependently. The implication of these results were discussed in terms of generation.

Key words : independency and interdependency, construal of the self, correlates, conflicts, generation.

ここ数年において、「自己」の視点から、文化差を検討する理論が注目されてきている。

木内 (1995) は, Markus & Kitayama (1991) によって提出された, 「相互独立的自己観 (independent construal of the self)」と「相互協調的自己観 (interdependent construal of the self)」という2つの概念区分に基づいて, 個人差に焦点をあてた仮説的モデルを提出し, 独立・相互依存的自己理解尺度 (SII)²を開発している。

相互独立的自己観とは, 自己を他から切り離されたものであり, そしてかつ, 自己の中の誇るべき属性を見出し, 表現していく主体と見ることである。こうした自己観は, 欧米の文化において典型的であると言わ

れる。一方, 相互協調的自己観とは, 自己を他の人々と根本的に結びついていると理解することであり, そ

² Markus & Kitayama (1991) によって提出された2つの概念区分「independent construal (view) of the self」「interdependent construal (view) of the self」について筆者は, これまで「独立・相互依存的自己理解」という訳語を用いてきた。しかしながら, 北山・唐澤 (1995) が指摘しているように, 「相互独立的」とした方が, 単に「独立的」とするよりも, 「人がまわりから切り離された存在」という意味を表現するにはふさわしく, また, 「依存」という言葉は普通, 日本語では主体性の逆の意味で用いられることが多いこともあり, 「他者の存在を肯定的に自己の中に取り入れるることにより主体性を獲得する」といった意味の訳語には, 「相互協調」の方が「相互依存」よりも適切であるという見解に, 筆者も賛同することから, 北山らの訳語「相互独立的自己観・相互協調的自己観」に修正することにした。なお, 本論文においては, すべてこの訳語を一貫して用いることにした。

¹ 東京大学教育学研究科 (Graduate School of Education, University of Tokyo)

してかつ特定の他者との協調的でもちつもたれつの関係を維持し、実現させていく主体と見ることである。こうした自己観は、日本を含む東洋の文化の前提になっているという(北山, 1995; Kitayama & Markus, 1994; Markus & Kitayama, 1991, 等)。

木内(1995)は、「相互独立的自己観と相互協調的自己観という2つの側面が個人の中に両方形成され、それらの2つの自己観の相対的な優位性が社会的行動の個人差を生じさせる」とする仮説的モデルを提出した。SIIは、そうしたモデルに基づいた個人差を測定する一次元の尺度である。木内(1996)は、SIIの平均得点から、欧米在住経験のある大学生は相互独立的自己観が最も優勢であり、音楽大学の学生が次に続き、一般の大学生が相互協調的自己観が最も優勢であることを確認している。こうした結果より、他者と切り離された自己の属性を実現させることが価値あることとされる欧米の文化や、日本であっても芸術を専門とする大学などの文化の影響を受けた人は、相互独立的自己観を優先させやすく、一方、相互協調的な対人関係の維持を大切にする一般的な日本文化の影響を受けた人は、相互協調的自己観を優先させやすいことが示された。

さらに、木内(1996)は、SII得点と性別アイデンティティ(Bem, 1974; 岡本, 1988, 1991)尺度得点との間に相関が見られたことを報告している。性別アイデンティティ尺度は、社会文化的に男性にとって好ましいとされる心理的属性(自己主張性, 達成志向, 等)と女性にとって好ましいとされる心理的属性(表出性, 対人考慮の深さ, 等)を測定するものである(岡本, 1988, 1991)。相互独立的自己観が優勢なものは、男性性がかなり高く、相互協調的自己観が優勢なものは、女性性が若干高いという傾向が見られたことにより、相互独立・相互協調的自己観が、社会・文化的適応と関連することが示唆された。

高田(1993)は、社会的比較を通じた自己概念形成が促進される要因として、文化的要因を指摘している。高田(1993)は、日本人とアメリカ人の大学生の比較より、社会的比較は相互協調的な日本文化に顕著であり、また、日本人の中でも相互協調的自己観が優勢な者に目立つことを報告している。高田・松本(1995)は、こうした結果より、自己概念を形成する際に他者を参照する方途を用いることが、相互協調的な自己を形成していく過程と密接に関連する可能性を指摘している。

さらに、高田(1994)は相互独立・相互協調的自己観の発達的变化と環境要因について検討し、相互独立・相互協調的自己観の形成における青年期の重要性和、

相互独立・相互協調的自己観が個人の生育環境における人間関係の影響(両親・教師・友人)を受けて形成される過程を示唆する結果を報告している。

また高田・松本(1995)は、日本文化における自己の特質について検討し、「甘え」(土居, 1971), 「間人主義」(浜口, 1982), 「日本の自我」(南, 1983)等の概念から示唆されるいわゆる日本の自己は、いくつかの下位様態から構成され、いずれの下位様態にも明らかな世代差(大学生と成人)が存在することを見出している。

本研究では、先行研究を踏まえ、木内(1995, 1996)の相互独立・相互協調的自己観の理論的視点から、以下の3つの点を検討することを目的とする。

第1の目的は、相互独立・相互協調的自己観の社会・文化的な形成要因を検討することである。木内(1995, 1996)や高田(1993, 1994)の研究より、相互独立・相互協調的自己観が文化的影响を受けて形成されることが徐々に明らかになってきた。しかしながら、そうした文化的影响の具体的で詳細なメカニズムは、明らかにされていない。そこで、どのような具体的な社会・文化的要因が相互独立・相互協調的自己観の形成に関与しているのかを、探索的に吟味する。

第2の目的は、社会・文化的適応の問題として、相互独立・相互協調的自己観の在り方と状況からの要求との葛藤を検討することである。木内(1995)は、個人の中に相互独立的自己観と相互協調的自己観という2側面が存在することを、これまでの人格心理学や社会心理学の理論から位置付けているが、その2側面の在り方と社会・文化的適応との関連については、実証的に検討されていない。相互独立的自己観と相互協調的自己観の2側面の優先のさせ方(相対的な優位性)が個人において、ある程度一貫したもので、その人を特徴づけるものと捉えれば、そうした傾向に反することを要求する社会・文化的な状況において、葛藤やストレスを感じる事が予想される。そこで、本研究では、こうした視点から、実証的に検討する。

第3の目的は、上記の2つの点を、女子大学生とその母親との世代間比較を通して検討することである。女子大学生とその母親の世代では、それぞれ異なる時代背景の中で人格を形成してきたと想定される。独立・相互協調的自己観が社会・文化的影响を受けて形成されるならば、世代による違いが見られることが考えられる。近年、国際化、情報化などの影響によって、日本の文化も欧米の文化の影響を大きく受けてきたと言えよう。そうした視点に立てば、伝統的な日本文化の中で育った母親世代は、学生世代よりも相互協調

的自己観が優勢なことが予想される。そこで、そうした世代差の検討を通して、社会・文化の変化と独立・相互協調的自己観の関連を模索する。

なお、本研究では、女子大学生とその母親を被験者として選んだが、その理由は次の通りである。Markus & Kitayama (1991) は、性 (gender) による重要な相違の多くが、多様な自己観と関係していることを指摘している。そして、他者との関係を育成したり、維持したりすることが、女性にとって非常に重要なことであり、それらは、彼女らの自尊心や自己評価と関連があることが考えられることを述べている。また、木内 (1995) の SHI 得点においても、有意な性差が見られ、女性の方が男性よりも相互協調的自己観が優勢であることが示されている。そうしたことから、相互協調的な価値観を重視するとされる日本文化において、とりわけ女性が典型的な相互協調的自己観の特徴を備えていることが想定される。そうした視点より、本研究では、女性だけに焦点を当てることにした。

予備調査

本研究の第1の目的である相互独立・相互協調的自己観における、社会・文化的な形成要因の影響を検討するにあたって、どのような要因が形成要因となりうるのかを探索的に調べ、これら可能な形成要因に関する尺度項目を収集することと、第2の目的の相互独立・相互協調的自己観の在り方と状況からの要求との葛藤を検討するにあたって、どのような状況において葛藤を感じやすいかを調べ、葛藤に関する尺度項目を収集するために予備調査を行った。

方法

心理学を専攻している東京都内の私立女子大学の学生21人を対象に、Markus & Kitayama (1991) および木内 (1995) の「相互独立・相互協調的自己観」の理論を解説した。次に、上記の21人の学生に、「①自らの体験を振り返って、どのような要因が、相互独立・相互協調的自己観の形成に関与しているか、②自らの体験を振り返って、自分の中の相互独立的自己観と相互協調的自己観という2側面の在り方と状況からの要求との葛藤を感じたことがあるか、また、どのような状況でそうした葛藤を感じたか。」について、自由記述で回答を求めた。

調査時期 1995年10月

結果

1. 相互独立・相互協調的自己観の社会・文化的な形成要因について

自由記述を分類するにあたっては、箕浦 (1984) によって検討された、対人関係領域に関するその文化特有の意味空間 (対人関係の文化的なルール) の体得過程に影響する諸要因をあらかじめ想定した。その要因とは、箕浦 (1984) の理論的考察の中で取り上げられた、社会・文化化の行われる場の条件に関するもので、「家庭環境」「学校環境」「同輩環境」「異文化滞在に関すること (滞在期間、等)」の4要因である。

自由記述の分類は、まず、上記の箕浦 (1984) のカテゴリーを参考に行われた。箕浦 (1984) の研究は、異文化体験をした子どもを対象としているため、本研究に適用するには修正を必要とし、最終的には、自由記述の内容より、以下の4つの要因に分類された。さらに、それぞれについて、後の尺度構成のための概念定義を行った。

① 家族の影響

“相互独立・相互協調的自己観を促進させる、両親を中心とする家族からの、しつけや教育などの働きかけ”(21人中19人の学生が、「母親は、個性を発揮することを重視していた。」といった家族の影響の重要性を指摘している。)

② 過去の学校生活の影響

“相互独立・相互協調的自己観を促進させる、過去の学校生活における友人、教師、校風などからの働きかけ”(11人の学生が、「仲間との集団行動を求められることが多かった。」といった過去の学校生活の影響の要因を指摘している。)

③ 現在所属している集団 (家族以外) の影響

“相互独立・相互協調的自己観を促進させる、家族以外で最も重要だと思われる集団における、その成員および集団の質からの働きかけ”(12人の学生が、「集団行動よりも、個人行動を求められることが多い。」といった集団の影響の要因を指摘している。)

④ 異文化体験の影響

“欧米の文化と接する体験 (直接体験、間接体験の両方を含む)”(4人の学生が、「欧米の人と交流する機会が多い。」といった異文化体験の影響の要因を指摘している。他の3要因と比較して、異文化体験について言及した人数は少ないが、箕浦 (1984) のカテゴリーに準拠し、加えることにした。)

2. 相互独立・相互協調的自己観の在り方と状況からの要求との葛藤について

21人中16人の学生が、相互独立・相互協調的自己観の在り方と状況からの要求との葛藤の存在を認めていた。そして、そうした葛藤を感じるパターンとして次の2つに大別できることが見出された。①相互協調的自己観が優勢なものが、相互独立的自己観に基づく行

動（以後、相互独立的行動と略記）を求められた時、②相互独立的自己観が優勢なものが、相互協調的自己観に基づくとされる行動（以後、相互協調的行動と略記）を求められた時。

調 査

予備調査の結果より、相互独立・相互協調的自己観における、可能となる形成要因としての4要因と2つの葛藤状況のパターンが見出された。そこで、本調査では、予備調査の結果に基づいて、前述した以下の3つの検討を行う。

1. 相互独立・相互協調的自己観の社会・文化的な形成要因について
2. 相互独立・相互協調的自己観の在り方と状況からの要求との葛藤について
3. 上記の2つの点における世代差について

方 法

質問紙構成

1. 独立・相互依存的自己理解尺度 (SII)：木内 (1995) が開発した、計16項目から構成される尺度で、回答形式は“Aにぴったりとあてはまる”に4点、“どちらかといえばA”に3点、“どちらかといえばB”に2点、“Bにぴったりとあてはまる”に1点を与える4件法である。(Aが相互協調的自己観の項目であり、Bが相互独立的自己観の項目である。つまり、尺度得点が高ければ、相互協調的自己観が優勢であり、低ければ、相互独立的自己観が優勢である。)
2. 社会・文化的な形成要因に関する項目

予備調査に基づいて、社会・文化的な形成要因を測定する尺度項目を作成した。回答形式はいずれも、“よくあてはまる”から“全くあてはまらない”の5件法であり、相互独立的自己観に影響を与えると想定される項目を反転項目とした。

① 家族の影響に関する項目：前述した概念定義に基づいて、相互協調的自己観に影響を与えると想定される6項目と、相互独立的自己観に影響を与えると想定される6項目の計12項目を独自に作成した。

② 過去の学校生活の影響に関する項目：前述した概念定義に基づいて、相互協調的自己観に影響を与えると想定される5項目と、相互独立的自己観に影響を与えると想定される5項目の計10項目を独自に作成した。

③ 現在所属している集団（家族以外）の影響に関する項目：前述した概念定義に基づいて、相互協調的自己観に影響を与えると想定される4項目と、相互独立的自己観に影響を与えると想定される4項目の計8項目を独自に作成した。

目を独自に作成した。

④ 異文化体験の影響に関する項目：前述した概念定義に基づいて、欧米文化の影響（相互独立的自己観に影響）に関する5項目を独自に作成した。

なお、上記の4つの新しく作成された尺度の項目は、心理学を専門・専攻とする複数の者により、項目内容の適否が吟味され、適切と判断された項目である。

3. 相互独立・相互協調的自己観の在り方と状況からの要求との葛藤に関する項目：予備調査の自由記述を参考に、①相互協調的行動を求められた時の葛藤と②相互独立的行動を求められた時に葛藤を感じるという2つのパターンを表わす計6項目を独自に作成した (TABLE 1)。

TABLE 1 相互独立・相互協調的自己観の在り方と状況からの要求との葛藤に関する項目

1. まわりの人と自分の意見が違った時、まわりに合わせる事に抵抗（ストレス）を感じる。(A)
2. まわりの人と異なる意見を主張する事に、抵抗（ストレス）を感じる。(B)
3. 集団の中で自分らしさを発揮する事に、抵抗（ストレス）を感じる。(B)
4. 自分らしさを抑えて、まわりの人から期待された役割を果たす事に抵抗（ストレス）を感じる。(A)
5. 自分の正直な気持ちを抑えて、まわりの人に合わせた態度をとる事に抵抗（ストレス）を感じる。(A)
6. 物事を自分1人の判断と責任によって決める時に、抵抗（ストレス）を感じる。(B)

注：(A)は、相互協調的行動を求められた時の葛藤。

(B)は、相互独立的行動を求められた時の葛藤。

調査対象者 東京都内の私立大学の女子学生99名。(平均年齢20.7歳、レンジは、18歳～22歳)。上記の女子学生の母親99名。(平均年齢48.8歳、レンジは、43歳～59歳)。母親の15%がフルタイム職業を持っている。

調査時期 1995年11月

調査方法 調査はすべて個人的に依頼した。

結 果

1. 相互独立・相互協調的自己観の形成要因の分析
 - (1) 社会・文化的な形成要因の測定尺度の検討

① 家族の影響 作成した12項目のそれぞれと、当該項目を除いた合計得点との相関（以下、部分一全体相関とする）を求めたところ、 $-.02 \sim -.12$ という低い値を示す項目が4個あったため、これらを除く8項目で尺度を構成した (TABLE 2)。その尺度のCronbachの α 係数は、.72であった。

TABLE 2 家族の影響に関する項目

1. これまで、両親が決めたことに従わされることが多かった。(A)
- *2. 家族は、これまで、家族それぞれの自主性を重視してきた。(B)
- *3. 母親は、個性を発揮することを重視していた。(B)
- *4. 父親から、「自分の意見は、他の人と違っても、はっきりと主張しなさい。」あるいは、「自分らしさを発揮しなさい。」といった内容のしつけを受けたことが多かった。(B)
- *5. 両親は、これまで、私の自主性を優先してきた。(B)
6. 母親から、「皆と合わせなさい。」あるいは、「目立つことはしてはいけない。」といった内容のしつけを受けたことが多かった。(A)
- *7. 母親から、「自分の意見は、他の人と違っても、はっきりと主張しなさい。」あるいは、「自分らしさを発揮しなさい。」といった内容のしつけを受けたことが多かった。(B)
- *8. 父親は、個性を発揮することを重視していた。(B)

注：(A)は相互協調的自己観に影響を与えると想定される項目。

(B)は相互独立的自己観に影響を与えると想定される項目。

* は、反転項目。

② 過去の学校生活の影響 部分・全体相関は、.19～.53の範囲にあり、作成した10項目すべてを尺度に含めることにした (TABLE 3)。その尺度の Cronbach の α 係数は、.70であった。

TABLE 3 過去の学校生活の影響に関する項目

- *1. 集団行動よりも、個人行動を求められることが多かった。(B)
- *2. 個性を発揮することを重視する教師が多かった。(B)
3. 仲間との集団行動を求められることが多かった。(A)
4. 自分の意見を主張する機会のない集団に属していた。(A)
- *5. 自分の意見を主張しやすい集団に属していた。(B)
6. 協調性を重視する教師が多かった。(A)
- *7. 自分のまわりには、協調的な人より、個性的な人が多かった。(B)
- *8. 個性を重んじる校風の学校で過ごしてきた。(B)
9. 協調性を重んじる校風の学校で過ごしてきた。(A)
10. 自分のまわりには、個性的な人よりも、協調的な人が多かった。(A)

注：(A)は相互協調的自己観に影響を与えると想定される項目。

(B)は相互独立的自己観に影響を与えると想定される項目。

* は、反転項目。

③ 現在所属している集団の影響 部分・全体相関は、.30～.42の範囲にあり、作成した8項目すべてを尺度に含めることにした (TABLE 4)。その尺度の Cronbach の α 係数は、.67であった。

TABLE 4 現在所属している集団の影響に関する項目

- *1. 自分のまわりには、協調的な人より、個性的な人が多い。(B)
2. 協調性を重んじる集団である。(A)
- *3. 自分の意見を主張しやすい集団に属している。(B)
- *4. 集団行動よりも、個人行動を求められることが多い。(B)
5. 自分のまわりには、個性的な人より、協調的な人が多い。(A)
6. 自分の意見を主張する機会のない集団に属している。(A)
- *7. 1人、1人の個性を重んじる集団である。(B)
8. 仲間との集団行動を求められることが多い。(A)

注：(A)は相互依存的自己理解に影響を与える項目。

(B)は独立的自己理解に影響を与える項目。

* は、反転項目。

④ 異文化体験の影響 部分・全体相関は、.43～.63の範囲にあり、作成した5項目すべてを尺度に含めることにした (TABLE 5)。その尺度の Cronbach の α 係数は、.78であった。

TABLE 5 異文化体験の影響に関する項目

- *1. 欧米（オセアニアを含む）で生活した経験がある。
- *2. 欧米の人と交流する機会が多い。
- *3. 欧米で、長く生活した経験のある人と交流する機会が多い。
- *4. 欧米の映画やテレビ番組を観ることが多い。
- *5. 欧米の文学を読むことが多い。

注：* は、反転項目。

(2) SII 得点と各要因の尺度得点との関連

① SII 得点と各要因の尺度得点との相関係数

相互独立・相互協調的自己観の形成要因を検討するために、SII 得点と、各要因の尺度得点との相関係数を学生と母親それぞれについて求めた (TABLE 6, 各尺度得点の平均と標準偏差については、TABLE 9 参照)。

TABLE 6 SII 得点と4要因の尺度得点との相関

要因	学生	母親
家族	.09	.33**
過去の学校生活	.29**	.19
現在の集団	.15	.32**
異文化体験	.21*	.26*

* $p < .05$ ** $p < .01$

その結果、学生群では、過去の学生生活の影響との間と、異文化体験の影響との間に、有意な相関が見られた。また、4要因の中では、家族の影響との相関より、過去の学校生活の影響との相関の方が高い傾向($p < .10$)が示された。一方、母親群では、家族の影響との間、現在所属している集団の影響との間、および異文化体験の影響との間に、有意な相関が示された。

② 各要因間の相関係数の検討

4要因間の重複度を検討するために、学生群と母親群それぞれにおける各要因間の相関係数を確認した(TABLE 7)。

TABLE 7 4 要因間の相関

	家 族	過 去 の 学 校 生 活	現 在 の 集 団	異文化 体 験
家族		.22*	-.15	.12
過去の学校生活	.25*		.13	.11
現在の集団	.30**	.29**		-.08
異文化体験	.34**	.08	.27*	

注：右上が学生，左下が母親

* $p < .05$ ** $p < .01$

学生群は、家族の影響と過去の学校生活の影響との間にのみ有意な相関が見られた。一方、母親群では、過去の学校生活の影響と異文化体験の影響との間の相関以外は有意であった。

なお、上記の4要因間の相関係数の絶対値の平均を、学生と母親それぞれについて求めたところ、学生群は.13、母親群は.26であった。

③ SII 得点を目的変数とした重回帰分析

上記のように、4要因間に有意な相関関係がいくつか見られたことより(特に母親群に多かった)、そうした要因間の重複度を考慮して検討するために、SII 得点を目的変数とし、4要因の尺度得点を説明変数とした重回帰分析を、学生と母親それぞれについて行った(TABLE 8)。その結果、学生群と母親群共に、説明率(R^2)は有意であった。学生群では、過去の学校生活の影響との関連が最も大きく、異文化体験の影響と関連する傾向が見られた。一方、母親群では、家族の影響とのみ関連する傾向が示された。

(3) SII 得点における学生と母親との関連

SII 得点における親子間の関連を検討するために、学生とその母親との SII 得点の相関係数を求めたところ、有意な相関は見られなかった。

TABLE 8 SII 得点を目的変数とした重回帰分析における各要因の標準偏回帰係数

要因	学 生	母 親
家族	.00	.23*
過去の学校生活	.29**	.11
現在の集団	.17	.15
異文化体験	.20*	.14
(R^2)説明率	.16**	.20**

* $p < .10$ ** $p < .01$

2. 相互独立・相互協調的自己観の在り方と状況からの要求との葛藤との関連

相互独立・相互協調的自己観の在り方と状況からの要求との葛藤を検討するために、SII 得点と2つの状況における葛藤(①相互協調的な行動を要求された時、②相互独立的な行動を要求された時)の尺度得点との相関係数を、学生と母親それぞれについて求めた。その結果、学生群では、相互独立的な行動を要求された時に葛藤を感じることに強い正の相関($r = .61, p < .001$)が見られ、相互協調的な行動を要求された時に葛藤を感じることに負の相関($r = -.41, p < .001$)が見られた。一方、母親群でも、相互独立的な行動を要求された時に葛藤を感じることに正の相関($r = .35, p < .01$)が見られ、相互協調的な行動を要求された時に葛藤を感じることに負の相関($r = -.25, p < .05$)が見られた。

3. 世代差の分析 (TABLE 9)

(1) SII 得点の世代差

SII 得点の平均値が、学生群と母親群とで異なるかどうかを検討するために、対応のあるt検定を行ったところ、有意な差は見られなかった。

(2) その他の尺度得点の世代差

SII 得点以外の尺度得点について、学生群と母親群の平均値の差を対応のあるt検定で分析した。その結果、異文化体験の影響のみに有意な差が見られ、学生群の方が母親群よりも尺度得点が高いことが示された。また、上記のそれぞれの尺度得点について、学生とその母親の相関係数を求めたところ、いずれも有意な相関は見られなかった。

考 察

1. 相互独立・相互協調的自己観の社会・文化的形成要因について

相関分析の結果より、学生と母親では、異なる形成要因が関与していることが見出された。学生は、相互

TABLE 9 各尺度得点の平均値と世代差

	学生	母親	t 値	相関係数
SII 得点	40.11 (5.97)	40.53 (5.66)	-0.40	0.00
家族の影響	22.30 (5.40)	23.43 (4.32)	-1.58	0.17
過去の学校生活	30.22 (5.02)	31.00 (5.07)	-0.88	0.07
現在の集団	23.18 (4.48)	23.36 (4.54)	-0.22	0.05
異文化体験	11.76 (4.45)	10.11 (4.80)	2.82**	0.17
葛藤(相互協調的行動を要求された時)	10.04 (2.55)	9.51 (2.50)	1.56	0.09
葛藤(相互独立的行動を要求された時)	8.44 (2.37)	8.34 (2.37)	0.52	0.10

注：() 内は標準偏差

** $p < .01$

独立・相互協調的自己観の形成において、過去の学校生活の影響と関連があることが示唆された。一方、母親については、相互独立・相互協調的自己観の形成は、家族の影響と現在の集団の影響と関連があることが示された。異文化体験の影響は、学生と母親両方の相互独立・相互協調的自己観の形成に関与していることが示唆された。

次に行った重回帰分析の結果より、相互独立・相互協調的自己観の形成に関する4要因の中で、学生は、過去の学校生活の影響を最も受け、次に異文化体験の影響を受けることが示唆され、一方、母親は、家族の影響のみ受ける傾向が示唆された。

こうした結果より、学生は、相互独立・相互協調的自己観の形成において、過去の学校生活の影響をかなり受けることが見出された。さらに、両親をはじめとする家族の影響との関連が薄かったことや、SII得点において、親子間に相関が見られなかったことより、現在の学生は、相互独立・相互協調的自己観の形成において、親の影響をあまり受けないことが考えられる。現在所属している集団の影響との関連は見られなかったが、比較的自由な環境である大学という場の特殊性が関係していることも考えられる。しかしながら、今

回の調査では、「これまでの学校生活」といった非常に大まかな質問項目であったため、今後は、より詳細なカテゴリーに分けて吟味していくことが必要であると思われる。

一方、母親は、相互独立・相互協調的自己観の形成において、家族の影響を受けることが示された。こうした見解は、家族の影響の尺度得点の標準偏差の値が、母親の方が学生よりも小さいにもかかわらず、母親だけに家族の影響との関連が見られたことから裏付けられよう。母親の世代では、両親をはじめとする家族が、人の社会化における重要な機能を果たしていたことが伺える。また、現在所属している集団(家族以外)の影響との関連も見られたが、被験者のほとんどがフルタイムの職業を持っていない主婦であることから、そうした集団がどのようなものであるかは不明瞭である。そこで、今後は、こうした点を明らかにする必要があると思われる。

異文化体験の影響については、学生と母親両方に関連が見られたが、その影響は、学生に強いようであった。今後は、欧米在住経験のあるものなどを対象とした、より詳細な調査が望まれる。

箕浦(1984)は、異文化体験をした子どもを対象にした詳細な分析から、対人関係領域に関するその文化特有の意味空間(対人関係の文化的ルール)を体得する重要な時期は、9歳から15歳前後の時期であることを示唆する結果を報告し、一方、高田(1994)は、相互独立・相互協調的自己観の形成における青年期の重要性を指摘していることなどから、今後はこうした見地から検討していくことも興味深い研究になるであろう。

2. 相互独立・相互協調的自己観の在り方と状況からの要求との葛藤との検討

分析の結果は予想どおりで、学生も母親も共に、相互協調的自己観が優勢なものが、相互独立的行動を求められた時に葛藤を感じやすく、一方、相互独立的自己観が優勢なものが相互協調的な行動を求められた時に葛藤を感じやすいことが確認された。全般的に、母親は学生に比べ、上記の傾向が弱いことが示唆されたが、今後は、被験者の職業や年齢を詳細に分析していくことが望まれよう。また、相互独立・相互協調的自己観の2側面の優先のさせ方(相対的優位性)が、個人の中でどの程度一貫したものであるのか、あるいは状況によってどの程度変動するものか、といった問題も、今後、社会・文化的適応との関連から検討していくべき重要な課題となるであろう。

3. 世代差の検討

SII 得点の平均値において、学生と母親との間に有意な差が見られなかった。こうした結果は、母親世代の方が、学生世代よりも相互協調的自己観が優勢であろうという予想に反するものであった。こうしたことから、社会・文化が変化していることが指摘されているにもかかわらず、相互独立・相互協調に関する対人関係の価値観は、現在に至るまであまり変わらないことが考えられる。一方、母親群は時代的には学生群よりも相互協調的自己観が優勢であっても、個人の年齢による変化に伴い、相互独立的自己観が優勢であるように変化し、結果的に学生群との差が見られなかった、という解釈も考えられる。木内 (1995) による、学生と社会人の SII 得点の比較においても男女ともに有意差が見られなかったことから、今後は、調査対象者の年齢を広げて、相互独立・相互協調的自己観の発達的な変化より世代差を検討していくことが必要と思われる。

しかしながら、相互独立・相互協調的自己観の形成要因については、世代差が見られた。学生は、過去の学校生活の影響を受け、母親は、家族の影響を受けていることが示唆された。こうしたことより、人格形成における家族の役割の重要性は、時代によって変化することも推測された。SII 得点において、親子間に相関が見られなかったことより、現在の学生は、母親の影響を受けることが少なく、むしろ、学校集団の仲間たちの影響を受けることが推測された。また、学生と母親それぞれにおける 4 要因間の相関係数の絶対値の平均値が、学生より母親の方が大きく、その結果として、重回帰分析において、母親の方には、4 要因独自の影響が見られなかった。こうした結果より、母親世代では、4 要因の影響は重複しており、比較的等質的な社会環境の中で人格を形成してきたことが推測される。一方、現在の学生は 4 要因の影響がそれぞれ独立しており、所属するそれぞれの集団や過去の体験などから異なる働きかけを受けてきたことが考えられる。そこで、今後は世代間や友人間のコミュニケーションの在り方を検討し、相互独立・相互協調的自己観の形成要因をさらに検討していくことが望まれよう。また、相互独立・相互協調的自己観の在り方と状況からの要求と葛藤においても、学生と母親に世代差が見られたが、こうした差の検討も、前述したように、今後の課題であろう。

総合的考察

本研究は、相互独立・相互協調的自己観の社会・文

化的な形成要因、相互独立・相互協調的自己観の在り方と状況からの要求との葛藤、および女子大学生とその母親の世代差を検討するものであった。分析の結果より、形成要因については、学生は、“過去の学校生活の影響”を受け、他方、母親は、“家族の影響”を受けることが明らかにされた。しかしながら、本研究における形成要因の検討は探索的であったため、今後は、4 つの形成要因の尺度をさらに洗練し、信頼性と妥当性を検討していく必要があると考えられる。また、自己観の 2 側面の在り方と状況からの要求との葛藤については、学生も母親も共に、相互協調的自己観が優勢なものが、相互独立的行動を要求された時に葛藤を感じやすく、一方、相互独立的自己観が優勢なものが相互協調的行動を要求された時に葛藤を感じやすいことが確認され、相互独立・相互協調的自己観という人格の 2 側面と葛藤状況との関連が示された。こうした結果を踏まえ、今後は、社会・文化的適応との関連を明らかにしていくことが望まれる。

引用文献

- Bem, S.L. 1974 The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 155-162.
- 土居健郎 1971 「甘え」の構造 弘文堂
- 浜口恵俊 1982 間人主義の社会・日本 東洋経済新報社
- 北山 忍 1995 文化的自己観と心理的プロセス 社会心理学研究, 10, 153-167.
- Kitayama, S., & Markus, H.R. (Eds.) 1994 *Emotion and culture : Empirical studies of mutual influence*. Washington, D.C. : American Psychological Association.
- 北山 忍・唐澤真弓 1995 自己：文化心理学的視座 実験社会心理学研究, 35, 133-163.
- 木内重紀 1995 独立・相互依存的自己理解尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 66, 100-106.
- 木内重紀 1996 独立・相互依存的自己理解—文化的影響およびパーソナリティ特性との関連— 心理学研究, 67, 308-313.
- Markus, H., & Kitayama, S. 1991 Culture and the self : Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 南 博 1983 日本的自我 岩波書店
- 箕浦康子 1984 子供の異文化体験—人格形成過程の

心理人類学的研究— 思索社

岡本浩一 1988 独自性欲求の男女差に関する基礎的研究 社会心理学研究, **3**, 56-62.

岡本浩一 1991 ユニークさの社会心理学—認知形成的アプローチと独自性欲求テスト— 川島書店

高田利武 1993 青年の自己概念形成と社会的比較—日本人大学生にみられる特徴— 教育心理学研究, **41**, 339-348.

高田利武 1994 独立的・相互依存的自己理解の発達的变化と環境要因 日本グループ・ダイナミック

ス学会第 42 回大会論文集, 142-143.

高田利武・松本芳之 1995 日本の自己の構造—下位様態と世代差— 心理学研究, **66**, 213-218.

謝 辞

本論文の作成にあたり、ご指導をいただきました市川伸一助教授（東京大学）と南風原朝和助教授（東京大学）に深く感謝いたします。

（1996.4.2 受稿, 12.13 受理）